学位論文の要旨（論文の内容の要旨）
Summary of the Dissertation (Summary of Dissertation Contents)

論　文　題　目
Dissertation title
青年海外協力隊体育隊員の「成果」に関する研究：国際ボランティアの研究動向を踏まえて

広島大学大学院人間社会科学研究科
Graduate School of Humanities and Social Sciences,
Hiroshima University
博士課程後期　教育科学専攻
Doctoral Program　国際教育開発プログラム
学生番号　D203935
Student ID No.
氏　名　白石　智也
Name　Seal

本論文は，日本の国際協力機構（Japan International Cooperation Agency：以下「JICA」と略す）が実施する青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers：以下「JOCV」と略す）事業の「成果」について検討することを目的に，「体育」という職種で派遣されている隊員（以下「体育隊員」と略す）に焦点を当てた研究である．体育隊員の「成果」について具体的に検討するために，体育隊員に関する複数の事例研究を関連付けながら，多角的な視点から分析及び考察を行った．本論文の構成を概説すると，第1章の序論に続き，国際ボランティアに関する先行研究の整理（第2章）及び体育隊員の派遣動向と体育隊員に関する先行研究の分析（第3章）を行った上で，体育隊員の「成果」に関する事例研究を実施し（第4章・第5章・第6章），第7章に結論が位置付けられる．

第1章では，本研究の背景を整理した上で，問題の所在について論じた．問題の所在として，JOCVの残してきた「成果」を検討する必要はあるものの，JOCVのみならず，国際ボランティアの「成果」に関する研究は未だ少ない．また，国際ボランティア研究を実施する際は，何らかの性質に基づき，細分化された条件のもとで行うべきであるとされており，JOCVに関しては，職種を限定した中で研究を進める必要があると考えられる．したがって，本研究では，JOCVの中核を担ってきたと考えられる体育隊員に焦点を当て，先述した通り，体育隊員の「成果」を検討するという本研究の目的に至った．さらに，国際ボランティアに関する先行研究を概観し，（1）受入国でのコミュニティに関する「成果」，（2）ボランティア自身に関する「成果」，（3）日本でのコミュニティに関する「成果」，という3つの観点を分析的枠組みとして設定した．本論文では，それぞれの観点に関する「成果」を検討すると同時に，各観点の「成果」同士の関係性についても議論した．加えて，本論文全体の研究方法としては，質的研究法を適用した．

第2章では，2008年以降に出版された国際ボランティア活動の「成果」が記されている先行研究を体系的に整理し，この分野における研究動向の検討，また，今後の課題と展望の導出を目的とした．研究対象となる先行研究の選定方法として，複数のデータベースにおいて先行研究の検索を行った．その上で，関連文献の検討及びスノーボールサンプリングによって，分析対象となる先行研究を追加し，計23編を分析の対象とした．これらの先行研究を，本論文の分析的枠組みである3つの観点に即して体系的に整理し，国際ボランティア研究における今後の方向性を議論した．結果として，ボランティアの信念やアイデンティティなどの変容に焦点を当てる研究の必要性などが示唆された．

第3章では，JICA所有の任意抽出データを基に，JOCV全体，並びに，体育隊員の派遣者数の推移について明らかにすると同時に，体育隊員に関する先行研究のレビューを実施し，それらの実態の把握と，体育隊員に関する研究の今後の課題の導出を目的とした．まず，派遣者数の推移について，近年，体育隊員及びスポーツに関する職種で派遣された隊員の派遣者数は増加しており，その中でも，体育隊員の派遣者数の割合は上昇していることが明らかになった．次に，先行研究のレビューの結果として，体育隊員に関する先行研究は6編と少なく，更なる研究の蓄積が，体育隊員に関する研究の質の担保及び向上に繋がると考えられた．他方，この6編は，（1）JICAが所有しているデー

タを用いた研究，（2）受入国の実態や体育隊員の活動の「成果」を調査した研究，に二分されていた．さらに，（2）に分類された研究の中には，開発途上国の人々の運動習慣や運動能力を調査し，体育隊員の派遣に対する提言を行う研究もあり，体育隊員に関する研究は，体育隊員の活動の検討のみならず，開発途上国の実態の調査という観点からも展開することが可能であると示唆された．

第4章では，ウガンダ共和国（以下「ウガンダ」と略す）で体育隊員が開催した体育教員研修会を事例とし，体育隊員の活動が受入国でのコミュニティに与えた影響について明らかにすることを目的とした．研究の方法として，計2回の研修会において，参加者を対象に（第1回：15人，第2回：22人），アンケート調査を実施した．さらに，両方の研修会に参加したウガンダ人体育教員A（以下「教員A」と略す），調査実施時期に教員Aとともに活動をしていた体育隊員B，研修会実施時期に教員Aとともに活動をしていた元体育隊員C，の3名に対して，インタビュー調査を実施した．アンケート調査で得られた自由記述について，KJ法を援用して分析を行い，また，インタビュー調査で得られたテクストデータについて，Steps for Coding and Theorization（以下「SCAT」と略す）を援用して分析を行った．結果として，体育隊員は，体育教員研修会を通して，開発途上国の体育教員が自発的に学ぶためのモチベーション向上に寄与している可能性が窺えた．

第5章では，体育隊員を経験した中で，「体育教師としてのアイデンティティ」から「体育教師教育者としてのアイデンティティ」に変容し，体育教師教育者の職を志すようになった筆者自身を事例として取り上げ，体育隊員としての経験が，体育隊員のアイデンティティに与えた影響について明らかにすることを目的とした．研究の方法として，セルフスタディを援用し，「批判的友人」と呼ばれる身近な専門家集団とのグループインタビューで得られたテクストデータと，体育隊員として活動を行っていた筆者が書き記していた日記について，SCATを援用して分析を行った．結果として，受入国の中でも大規模校に派遣され，受入国の体育の発展のために従事する体育隊員は，体育教員の質という課題に目が向き易く，体育教師教育者としての活動を行うことも可能であることから，自らの役割を体育教師教育者に自己分類する可能性が高いことなどが明らかになった．

第6章では，体育隊員の経験者が，体育隊員経験を通じてどのように変容したと感じているか，また，体育隊員経験をどのように日本でのコミュニティに還元しているか調査し，体育隊員経験者の変容と帰国後の社会還元について明らかにすることを目的とした．調査対象者は，過去に体育隊員として活動を行った経験のある20代から50代までの男女12名であり，各調査対象者に対してインタビュー調査を行い，得られたテクストデータについて，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析を行った．結果として，体育隊員経験者は，体育隊員経験を通じて，語学力及びコミュニケーション能力の向上を実感するが，その中でも特に教員経験の乏しい体育隊員に関しては，体育授業の準備や運営などに関連する能力も習得することができると推察された．また，帰国後に，日本の教育現場で働く体育隊員経験者は，勤務先の学校において，周囲の人々にその経験を共有しており，その結果，教え子や同僚が国際協力に興味を持ち，次なる体育隊員が輩出されていることなどが示唆された．

第7章では，結論として，第1章から第6章までの議論を踏まえた上で，体育隊員の「成果」について，総合的に考察を行った．また，本論文の分析的枠組みとして設定した3つの観点に関する「成果」が，どのように関連しているのかについても検討した．結果として，まず，受入国でのコミュニティに関する「成果」について，体育隊員は，開発途上国の体育教員の自助努力及び職能開発を促す活動を行っていることが窺えた．さらに，それらの活動は，体育隊員の活動中，もしくは帰国後に，何らかのプロジェクトなどで広がりをみせる可能性があることも示唆された．続いて，ボランティア自身に関する「成果」について，体育隊員には，受入国で注力した活動に伴う変容がみられ，それには，受入国での配属先の状況が強く影響していると考えられた．加えて，それらの変容は，帰国後の職業・職種の選択にも繋がり，体育・スポーツを通じた国際協力の仕事に就き，帰国後も受入国の発展に従事している人も存在した．そのうえ，体育隊員経験を通じて，種々の能力の成長や興味・関心の高まり及び広がり，性格・価値観の変容がみられ，これらも，帰国後の職業・職種の選択に影響を与えていることが示唆された．次に，日本でのコミュニティに関する「成果」について，体育隊員経験を通じた各種能力や精神面の成長を，周囲の人々との人間関係の中で発揮している体育隊員経験者の様子が窺えた．また，体育隊員経験者は，自らの受入国での経験を，周囲の人々に共有することで，そのような人々の国際開発に対する関心を高めていることが明らかになった．このことについては，出前講座などの講話だけでなく，職場の教え子や同僚など，周囲の人々との会話の中でも，そ

のような社会還元を行っていることが窺えた．そして，その周囲の人々が，新たに体育隊員となり，今まで体育隊員が行ってきた活動に上乗せする形で，受入国でのコミュニティにおいて，「成果」を蓄積しているというサイクルが回っていることが窺えた．これらの「成果」は，受入国の他組織との連携や，JICA現地事務所の更なる活用，継続的な体育隊員の派遣などの実現によって，より高く積み上がっていくものと期待される．

本論文の課題及び今後の展望として，（1）対象者の偏りと対象者数の限界，（2）質的研究法の限界，（3）他職種の隊員や他国の国際ボランティアとの比較の必要性，の大きく3点が挙げられた．本論文において得られた仮説を基に，今後は，定量的な調査や職種別の比較検討などを行う必要があると考えられる．

（3908字）

備考　論文の要旨はＡ４判用紙を使用し，4, 000字以内とする。ただし，英文の場合は1, 500語以内とする。

Remark: The summary of the dissertation should be written on A4-size pages and should not exceed 4,000 Japanese characters. When written in English, it should not exceed 1,500 words.